

ビュフォンの「人間誌」(『自然誌』より) その2 (注1)

西 川 祐 子*

Sur l' «Histoire naturelle de l'homme» de Buffon

Yuko Nishikawa*



HISTOIRE NATURELLE DE L'HOMME.

De la nature de l'Homme.

QUELQU'INTÉRÊT que nous ayions à nous connoître nous-mêmes, je ne fais si nous ne connoissons pas mieux tout ce qui n'est pas nous. Pourvûs par la Nature,

上にかかげた挿絵は、『自然誌』(1749年版)の「人間誌」第一頁にあって、本文のうちの次の節に対応するものとおもわれる。

「人の両性の身体のすべては、人間が地球の支配者(maitres)となることを予告しており、人間(l'homme)は、外観からして、他の生物に優越することが明らかである。人間は丈高く、まっすぐに立ち、指揮官の態度をとり、頭は天をにらみ、その容貌には威厳の徴が刻まれている…」(注2)。ここでは、人間が四つ足でなく両足で立つことも、地をはなれて天に近づく徴とされているかのようである。

*外国語系列(Department of Liberal Arts and Sciences—Foreign Languages)

第4章 ビュフォンの人間観

本論では前号^(注3)にひきつづいて、ビュフォンの『自然誌』、とくに「人間誌」のなかに西欧ヒューマニズムの原型の一つをさぐりたいとおもう。ビュフォンは当時の宗教界から非難されることが予想されるにもかかわらず『自然誌』の動物の中に人間をつけ加える一方で、人間に地球全体という十八世紀にはまだ新しく発見されたばかりの空間を支配し、自然という客体の全体を把握、利用する主体の位置を与えたのであった。「人種」の章で見たように、ビュフォンは大航海時代以後の航海者、旅行者、軍人、商人、伝道者たちなど情報提供者の手記、報告書を集めて、啓蒙時代の哲学者 (philosophe) の眼でこれを読み、世界の知られているかぎりの人種の特色を記述した末に、それぞれの人種の個性、肌の色、体格、性質、習俗の差にもかかわらず、むしろその差が段階を追うニュアンスの差であるがゆえに、人間はもともと一つの種であるという画期的な結論に達した。では「人間」はどのような動物なのか。

『自然誌』初版全44巻の第2, 3巻(1849)に収められている「人間誌 (Histoire naturelle de l'homme)」の各章には、次のような題名がつけられている。

人間の本性について (De la nature de l'homme)

幼少年期について (De l'Enfance)

思春期について (De la Puberté)

成年期について (De l'Age viril)

老年と死について (De la Vieillesse et de la Mort)

人間の描写 (Description de l'homme) —ドーバントン担当部分

視覚について (Du Sens de la vue)

聴覚について (Du Sens de l'ouïe)

感覚一般について (Des Sens en général)

人種 (Variétés dans l'espèce humaine)

まず「人間の本性」は人間誌の前書きにあたる章であって、「わたしたちはわたしたち自身を知ることに関心をもたせようとも、わたしたち自身を知る以上に、わたしたち以外のものすべてをよりよく知っているのかもしれない」^(注4)と書きはじめられている。「汝自身を知れ」とは、ソクラテス以来の西洋哲学の一つの伝統であり、「自身を知る se connaître」という再帰代名動詞の使用は新しいことではないが、自己認識の方法が問題となる。

ビュフォンは、認識は何よりも比較から得られると考え、「絶対に他と比較できないものは、つまり全く理解不可能なものである」^(注5)と言う。そこでまず比較の不可能な絶対的存在である神を認識の対象からとりのぞき、「人間」を含むのこりのものはすべて相対的な存在として比

較と認識が可能であるとする。こうして「人間」は「動物」(les animaux) の範疇 (classe) に入れられ、他の動物と比較されることになる。

その上で「人間」は、身体、諸器官、動作など外から観察できる面においては、他の動物たちと非常によく似ているが、記号つまりことばを用いて内面の思考を外へむかって表現し、他人に伝える能力によって、動物とは、はっきりと区別されるとする。「人間は理性のある存在 (être raisonnable) であり、動物には理性はない。肯定と否定との答のあいだには中間が無いのとおなじく、人間の本性は動物の本性と全く異っており、似ているのは外面だけである」(注6)

以上のように「人間の本性」の章は、まず慎重に「神」を自然誌から省き、ついで人間を動物の範疇に入れると同時に、理性とことばを有する点で人間を他の動物から細心に区別することによって終わっている。ところが後の章を読むと人間の優越性を強調するこの前書きは、実は人間の外面、ビュフォンの言う動物的な面の観察をつづけ、ときには動物実験を用いて人間を動物と同列において人間の生理を四足動物誌と同じく人間誌として書くための準備工作であったことがわかる。フランス十八世紀の出版の条件はきびしかった。出版には前もって出版許可が必要であり、出版後も国王や高等法院の名で発売禁止、没収、焚書、著者の投獄がしばしばあった。王権を破壊する危険思想、聖書の教えと食いちがう反宗教思想にたいする監視の目はたえず光っていた。ビュフォンはその著書の中で神学と国内政治について触れることをできるだけ避けようとしている。『自然誌』は王立印刷所から発行される本なのであるが、「人間誌」を書くにあたってビュフォンがとくに気をつけなければならなかったのは、教会が支配する時代の敬虔な人びとの反応であった。ビュフォンは前書きの章で予防線を張っておけば、後の章で人間についての唯物論的な見方を大胆に押しすすめることができると考えたとおもわれる。

つづく4章では、人間の生涯の4つの時期が順番に観察され、人間は生まれ、生長し、成熟に達するや衰弱をはじめ、やがて必ず死ぬ存在として書かれる。ビュフォンは死を「人間が身体から離れ、身体を放棄し、身体をもともとそこん属している平凡な物質の塊 (la masse commune de la matière) に還元する瞬間」(注7) と呼ぶのであるが、魂の永遠については触れない。

「幼少年期」の章は「人間の弱さについての観念を与えるものがあるとすれば、誕生直後の人間の状態ではなかろうか。子どもはまだ自分の器官も感覚も使用することができず、あらゆる種類の助けを必要としているのであって、悲惨と苦悩のイメージそのものである。彼は生涯の最初の時期には他の動物よりも弱く、不確かでゆらめく生命は今にも消えそうである」(注8) と書きはじめられている。

新生児には乳を与える前に砂糖入りぶどう酒を与えると胃を強くするなどと書かれているところを見ても、ビュフォンが観察しているのはもっぱら、彼の身近かにいるフランス人の子どもである。カニクソを排泄し、黄疸の症状をあらわし、頭蓋骨の一部はまだふさがっておらずピクピクと動く、首がすわらない、目が見えないなどという特徴は、わたしたちが知っている東洋人の新生児と同じであるが、蒙古班はあらわれない。目の色と髪の毛の色はさまざまあって、とくに生まれたとき金色の髪の毛の大部分は生長と共に色を濃くして茶色の髪となると書かれているの

は、やはり金髪と青い目が尊重され、ところがヨーロッパのまん中に位置するフランスには、金髪と青い眼の組合せはむしろ少ないからであろう。肌の色は、黒人の子どもを誕生直後からヨーロッパで育てても白く変りはしないということがすでに知られている。

ビュフォンは、体格、肌や髪、眼の色以上に、子どもの養育の習俗が世界の各民族のあいだでさまざまに異なることも知っている。描写の中心は、フランスの習俗にあるが、これが必ずしも最上とはされておらず、むしろ批判的に歎息されているところが興味深い。

ビュフォンはまず、乳児を大量の布で身動きならぬほど固く巻き、柔らかくさだまらない体形をととのえようとする西洋の襁褓（マイヨ *le maillot*）に疑問を抱いている。「マイヨを巻きつけず、赤ん坊は裸の上に衣をまとわせるか、何かでおおうだけにしておく他の民族の方が、われわれよりもよいことをしているのではなかろうか。シャム人、日本人、インド人、黒人、カナダとヴァージニアとブラジルの未開人そして南アメリカの大部分の民族は裸の子どもを寝床にひろげた綿や毛皮の上にねかせている」（注9）と書く。同じく、泣く子を入れてゆさぶって寝かしつける西洋の揺りかごも、幼児の頭脳に悪影響を与えるにちがいない、とみなす。

栄養に関してはビュフォンは母乳がよいと力説する。胎内では長いあいだ母乳とよく似た液体の中にいて養われているのだから、乳母の乳よりも生みの母親の乳の方が子どもの体質に合うにちがいないという意見である。もし乳母をえらぶのなら、その健康に注意すること、一つの村の全体にある性病がひろがっており、乳母があずかった子どもを通して病気がさらに遠くへ拡った例も多いのだ、と言っている。赤ん坊を母乳で育てる民族は多く、離乳まで数年間、授乳する民族もある、離乳食としては穀物を牛乳で煮た粥、または大人の食物を噛みくだいて口移しに食べさせるがよい、とある。

以上のことさらに説明を読むと、人工乳のない時代に母乳で育てるのはむしろ普通のこととおもわれるのになぜわざわざ力説するかという疑問が生じる。当時のパリの上流および中流の家庭では、子どもは生まれるとすぐ近郊ないしはもっと遠い地方の農家へ里子に出す慣わしであった。ビュフォンはまた、子どもたちを一ヶ所とくに病院に集めるのはたいへん危険である。伝染病によって死なせるためのようなものだ、と警告しているが、これも当時のパリには棄子が多く、施設に集められた幼児の死亡率がとくに高かった事実を背景にして言われているのである。

一般に乳幼児死亡率は高かった。ビュフォンが西欧の養育の習俗に疑問を抱くに至る原因は、子どもがあまりにもよく死ぬことにある。ロンドンの統計だが、同時に生まれた子どもの約4分の1は一年以内に死に、二年の終りまでにはさらに3分の1減、三年目のあいだに半減、という指摘もある。自分がその中にひたっている習俗やイデオロギーの観察はむずかしいものであるが、ビュフォンは「人種」の章でみたように、旅行記ほかの資料によって異民族の習俗に精通していたために、比較が可能であり、西欧の習俗に批判の目を向けることができたものとおもわれる。

性の問題をあつかう「思春期」の章においてもビュフォンはさまざまな民族の習俗の比較対照を行うのであるが、細部の描写は節度ある文体で「哲学的冷淡さ（*cette indifférence philosophique*）」（注10）をもって、自分がたしかめたとおりのことを提示すると、わざわざ述べ

ている。「哲学的冷淡さ」とは、脱イデオロギー、科学的公正さという意味であろうか。

ビュフォンは、思春期は一般に男の子よりも女の子に数年早く訪れる、初潮年齢は気候風土に左右され、気温が低い地方よりも高い地方、田舎よりも都会、経済的に豊かで栄養の摂取がよい環境の方が悪い環境よりも、初潮年齢を早めることをこのときすでに知っている。初潮年齢の地域差とその原因についてのビュフォンの知識は現代の科学知識にほぼ一致しており、わたしたちはあらためてビュフォンが旅行者たちから集めた情報の量と質が秀れていることを知らされる。

この章ではビュフォンはアラブ、トルコ、ベルシャ、アフリカに広くある男子の割礼、もっと少範囲にある女子の割礼についてくわしく述べ、割礼は、少なくとも衛生上の必要を信じて行われているが、アジア、アフリカに残る去勢手術は貴婦人の仕える男たちの性的能力をあらかじめ奪う目的で行われ、野蛮である、と非難する。イタリアの職業的な男性ソプラノ歌手についても触れている。

これらのどちらかといえば遠い国の奇習の起源や理由についての考察の一方で、ヨーロッパに根強い処女尊重の習俗についても同じような冷静な観察がなされている。ビュフォンは解剖学者によれば一般に処女性の徴とされるものは不確かで、むしろ想像の産物である、本来は純潔という道德の問題であったものが所有の儀式や迷信にすりかえられており、処女性の尊重は「滑稽な偏見 (les préjugés ridicules)」(注11) であると断じる。民族によって、処女性を絶対視する習俗もあれば、逆に初夜権は必ず夫以外の男に与える習俗もある。神のものとして、儀式的な乱婚を行う習俗もあるのだと言う。旅行者たちの証言は性の習俗についてもっとも変化に富んでいたのかもしれない。記述の途中でビュフォンはついに「さまざまな国によって、嗜好や習俗は何と対照的なのだろう！彼らの考え方のちがいつきたら！」(注12)とまるで嘆息のような感嘆文をまじえている。

こうした徹底した相対主義の立場をとるにもかかわらず、婚姻については、ビュフォンは一夫一婦婚をもっとも自然の掟にかなうものとみなしている。理由は、人口の男女比は、どの地域においても、つねにほぼ同数であるからに他ならない。

ビュフォンは結婚の目的を子供を得るためと見なすが、不妊の原因は男女両性のどちらにもありうると考える立場は、処女性尊重の偏見を言う立場とおなじく、同時代の支配的なイデオロギーからの、むしろ完全ではないが、ある逸脱を意味している。

「壮年」の章は人間の生長の完成期としてとらえられ、人間の外形はこの時点で、各部分にわたって詳細に描写される。人体の美について論じられる章でもある。ビュフォンは、「古代人たちはかくも美しい彫像をのこしたのだから、古代の彫像は、人間の肉体のもっとも完全な表現とみなすことに異論はなかりう」(注13)と述べて、古典主義的な美意識をのぞかせる。ビュフォンはギリシア、ローマの彫刻はある個体をモデルにとってつくられたのではなく、人類全体をよく観察したうえで理想的なプロポーションを抽出したものだと考えている。ビュフォンが「人間 (l'homme)」と定冠詞をつけた単数名詞で指す人間のイメージはおそらくこれであろう。

ところがその数頁先きではビュフォンは「古代人の美の好みは我々とは異っていた。彼らは女

性のせまい額、ほとんど、つながりそうな両の眉を好しとしたのである」(注14)とも言っている。身体の各部分の特徴からさらに髪のかき方や流行に話がおよぶとき、民族と時代によって、美の規準はさまざまである。「中国や日本では、大きな顔、小さくてまぶたのたれ下った目、平たい鼻、小さな足、大きな腹が美しいのである」(注15)と書いている。美意識にあらわれるように、多様な現実を多様なまま認める自然観察者の視線と、多様な形態から、理想のプロポーションを抽出する哲学者の視線とは、ビュフォンの中に対立しながら共存しつづけている。

「老年と死」の章は、衰弱と死という、生物としてまぬがれがたい人間の運命を、人類に共通するものとして、単純にくっきりと描こうとしている。「人種、風土、食物、習慣のちがいは寿命とは何ら関係がない。(…) もっとはっきりと言うなら、寿命は慣習、習俗、食物の質によらず、何物も寿命を支配する機構を変えることはできない。ただ栄養のとりすぎ、または過度の栄養不足が寿命をちぢめるというだけのことなのである」。(注16) ビュフォンがここでさまざまな条件にもかかわらず一定の年数というのは、自然死にいたる寿命のことである。動物の寿命は生長の完成までの年数の約三倍、したがって生長に2、3年かかる犬の寿命は約10年、人間の生長がすっかり止まるのは30歳前後であるから、人の寿命は90歳から100歳という計算がなされている。寿命へ達さないのは病気その他の事故が原因である。

寿命は共通であるが、死を迎える態度、死生観、葬儀のやり方など、文化的な面は各民族がさまざまである。ビュフォンは未開人たちは一般に死者にたいして丁重で、最後の瞬間を注意深く見守り、死者を追悼して死者と共に長い時間を過すのであるが、自分たちは死者をうちやっけて逃げだし、死者と語るようにして共に過すどころか、できるだけ思い出の地から遠ざかることさえすると、比較している。

ビュフォン自身は同時代の多くの人びとのように死から目をそらす、あるいは単に不死をねがうことをせず、また彼が描いた未開人ともちがうやり方で、注意深く死を観察する。フランス18世紀、啓蒙の世紀は人間の幸福の追求を一つの課題とする時代であった。哲学者ビュフォンには、幸福の最大の障害とおもわれる死にどう対処すべきかという大きな問題が出されていた。

ビュフォンは幸福の障害は死そのものではなく、死にたいする恐怖心であると考えることからはじめる。死を恐れないうちに、生の各瞬間をそのたびに悔いなく生きるがよいというモラリスト的教訓も垂れるが、それ以上に死を冷静に客観的に見つめることをすすめる。そのため老年と死の章の最後には、いわゆる平均余命表である余命見込み表が附されている。

当時のヨーロッパにはトンチヌ年金(tontine)という一種の講が流行していた。加入者のあいだに死者が出るごとに、そのぶん、他の加入員の年金が増額になる仕組みであり、加入の損得を計るために、加入員の死亡率が記録されていた。ビュフォンはこれをヒントにして、さまざまな地方の教区に保存されている出生と死亡、人口の年齢構成の記録をとりよせた。数字にはある種の修正が必要であった。ビュフォンは年齢が5の倍数のところが多いのは、農民が自分の年齢の数え方を知らないで、司教は概数で記録しているのだろうと推測する。また、ある農村では子どもは三歳で半分は死ぬが、パリでは十六歳になってようやく半減するという大差がある。

これはパリの環境が良いからではなく、里子に出す習慣にともない乳幼児死亡は近郊農村に集中することになるのだと説明している。そこでビュフォンの作製する平均余命表は、都市と農村の統計を合せた数字から算出されている。

TABLE des PROBABILITÉS de la durée de la Vie.				(余命見込み表)			
AGE. (年 齢)	DURÉE DE LA VIE. (余 命)	AGE. (年 齢)	DURÉE DE LA VIE. (余 命)	AGE. (年 齢)	DURÉE DE LA VIE. (余 命)	AGE. (年 齢)	DURÉE DE LA VIE. (余 命)
ans. (歳)	années. mois. (年, 月)	ans. (歳)	années. mois. (年, 月)	ans. (歳)	années. mois. (年, 月)	ans. (歳)	années. mois. (年, 月)
0	8 0	22	32 4	44	19 9	66	8 0
1	33 0	23	31 10	45	19 3	67	7 6
2	38 0	24	31 3	46	18 9	68	7 0
3	40 0	25	30 9	47	18 2	69	6 7
4	41 0	26	30 2	48	17 8	70	6 2
5	41 6	27	29 7	49	17 2	71	5 8
6	42 0	28	29 0	50	16 7	72	5 4
7	42 3	29	28 6	51	16 0	73	5 0
8	41 6	30	28 0	52	15 6	74	4 9
9	40 10	31	27 6	53	15 0	75	4 6
10	40 2	32	26 11	54	14 6	76	4 3
11	39 6	33	26 3	55	14 0	77	4 1
12	38 9	34	25 7	56	13 5	78	3 11
13	38 1	35	25 0	57	12 10	79	3 9
14	37 5	36	24 5	58	12 3	80	3 7
15	36 9	37	23 10	59	11 8	81	3 5
16	36 0	38	23 3	60	11 1	82	3 3
17	35 4	39	22 8	61	10 6	83	3 2
18	34 8	40	22 1	62	10 0	84	3 1
19	34 0	41	21 6	63	9 6	85	3 0
20	33 5	42	20 11	64	9 0		
21	32 11	43	20 4	65	8 6		

(注17)

ビュフォンはこの表を次のように読むようにすすめている。生まれたばかりの子どもは異常に高い乳児死亡率のため平均八年の余命しか期待できないが、誕生1年目まで生きのびれば、一挙に平均33年の余命を期待することができる。七歳までは一年生きのびるごとに余命も延びる。その後は当然、余命は減少してゆくのであるが、八十歳を越えると減少度はゆるやかになり、表は

余命が零にはならないところで終わっている。しかし、「死は避けがたい (La mort est inévitable)」^(注18) のであり、不死は幻想にすぎない。それどころか、人間は生まれるや、あらゆる年齢において死ぬ可能性をもっている、また絶えず死に向って進んでゆく。ビュフォンは「死という、かくもはっきりとした、かくも恐れられている状態の変化は、『自然』の中ではひきつづく変化の最後のニュアンスに他ならないのである。(…) 生命は完全に消えるずっと以前から消えはじめている (…) 自然の中では生命は絶対的なものではなく、増加と減少がみとめられるある量として考えなければならない。(…) なぜ死の瞬間を恐れるのか。死は前もって同じ次元の無数の瞬間によって準備されており、死は誕生とおなじく自然なものであり、死も生もわれわれがそれと感じ気づかぬうちに訪れるものである」。^(注19) と書く。生と死のあいだに絶対的な差をみとめず、ニュアンスのちがいがあただけとするビュフออนの一種の自然主義とでも呼ぶべき考え方は、生と死、肉体と魂を区別するカトリシズムの死生観に抵触するものではなかっただろうか。ビュフオンは連続体である自然の全体の創造主はやはり「神」であるということにより辛うじて汎神論をまぬがれるにすぎない。

以上のようにして、生と死は生命の量の漸進的な増加と減少であるというビュフオンの説は余命見込み表になって表わされ、ビュフオンはこれを理性的に (raisonnablement) に読むことをすすめて、「老年と死」の章を終えている。ビュフオンの考える「人間」は必ず死すべきはかない存在であるが、自らの死を知る能力によって、他の動物にすぐれて強いとされているようだ。

前章で見たように、「人間誌」の「人種」の章には、黒>茶>黄>白など、肌の色その他の形容詞の序列があって、人類が一つの種であることを証明する連続的体系がつくられていた。「老年」の章をしめくくる余命見込み表は数字によって生と死の連続性を表現しようとしている。ビュフオンには比較を行う際につねに段階的ニュアンスの変化に注目して連続的体系をつくることによって差異の間隙を埋めようとする傾向があって、彼の世界観の特徴の一つとなっている。

1749年に「人間誌」をふくむ『自然誌』の最初の三巻が一千部刊行されると、その年のうちに予約はいっぱいになった。当時の出版界では異例の売れゆきである。なかでも、「人間誌」には附された余命見込み表は注目を集めた。ビュフオン自身、これを「人間誌」のなかでもっとも興味ある部分、と呼び、28年後に『自然誌』補遺第四巻において、さらにくわしい統計の数字を用いて確率の計算をやりなおしている。再論においては個人の寿命の問題だけでなく、疫病の流行と飢饉などの社会問題が人口動態におよぼす影響が扱われ、視界がさらにひろがるのであるが、28年後に出版される補遺の巻については、次の機会に論じたい。(未完)

注

- (1) 本論は、1984年10月12日に、「十八世紀の空間認識」研究会（京都大学人文科学研究所）において「ビュフオンの『人間誌』」と題して行った口頭発表の一部に加筆したものである。
 - (2) 《Histoire Naturelle》, tome IV, p. 206. 以下、引用は京都大学病理学教室所蔵本 (Aux Deux Points, chez Sanson & Compagnie) より行う。同本は初版とは構成が一部変えられた普及版である。
 - (3) 西川祐子「ビュフオンの『人間誌』(『自然誌』より) その1」, 中部大学国際関係学部紀要 No.1 参照。
- 第1章 ビュフオンの『自然誌』について

第2章 『自然誌』の構成と「人間誌」の位置

第3章 「人種 (Variétés dans l'espèce humaine)」

(4)《Histoire Naturelle》, tome IV, p. 113

(5) ibid, p. 115

(6) ibid, p. 128

(7) ibid, p. 128

(8) ibid, p. 129

(9) ibid, p. 142

(10) ibid, p. 165

(11) ibid, p. 180

(12) ibid, p. 188

(13) ibid, p. 237

(14) ibid, p. 246

(15) ibid, p. 246

(16) ibid, p. 263

(17) ibid, p. 318-320

(18) ibid, p. 261

(19) ibid, p. p. 270-271

参考文献 (前号のつづき)

— Jacques Roger ; Diderot et Buffon en 1749, Diderot Studies V, 1963

— Stephen F. Milliken ; The Lyricism of the intellect : Buffon's Epoques de la nature, Diderot Studies VI, 1964

— 『特集＝博物学のすすめ』, 「現代思想」, 1985年2月号